



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024

第4号 1999年6月発行

東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5

TEL/FAX: (03)3418-4933

編集/発行: 広報部

聖書に見る隣人愛と福祉 牧師 陣内厚生

私は、かつて町のロータリークラブから講演を依頼されたとき、「福祉の起源について」という題を掲げたところ、大変喜ばれたことがありますが。講演内容の準備にあたって、ねらいどおり旧約時代の思想にその源流を見出し、ここぞとばかり聖書の話をつぶりさせて頂きました。という次第で、今こそ福祉という言葉が抵抗なく世の中に浸透していますが、キリスト教の歴史とは切っても切れるものではありません。私たちは、自分がどう生きるかを考えるならば、神がどのような目的をもって私たちをこの世に送りこんで下さったかを考える必要があります。神はご自身の意志を、言いかえるとその恵みと愛を表し、私たちにこれを証ししていくことを望んでおられます。私たちはこれに押し出される時、自分の人生に意味と価値を確かめることができるのです。聖書にある「隣り人」の概念、その隣り人への関わり方、私たちの生き方そのものの課題であると同時に、福祉への切り口ともなっていることを知りましょう。

しかし、私たちは現実には隣り人に出会って、いろいろな矛盾に出くわし、さんざん悩まされた経験をもっています。そして、自分自身がそれを解決しようと苦悶し、時として挫折することもありました。それは、私たちに必要な経験ではなかったのでしょうか。隣りに仕えるということとは、快楽や自己満足の伴う事柄であるはずがありません。だからといって投げ出してはならず、矛盾や挫折を超えてこそ、隣り人を愛する喜びが実感できるのではないのでしょうか。

「マタイ福音書二五章の有名な譬え話で、イエスは教えておられます。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と。すなわち、この世で最も小さい者である飢え渴いでいる人、宿のない旅人、着る物のない裸の人、起き上がれずに苦しむ病人、権力者の犠牲になった囚人に対して、時宜にかなった対応がなされたことを大きく評価しておられるのです。この隣り人への行動こそが、私たちの信仰生活の応用

問題と言ってよいでしょう。それはイエスご自身がすでに実践して下さった事柄でもあります。

いま福祉を考える時、人間をこよなく愛し、人格の尊厳を重んじ、人権を擁護するという基本が、イエスによって示されていることを、改めて知ることができます。まさにこの世の「最も小さい者の一人」に向けられる心こそが、福祉の原点と言えるでしょう。

加えて、イエスの教えられた愛の黄金律と言われる言葉、「人にしてもらいたいのと思ふことは何でも、あなたも人にしなさい」(マタイ福音書七の一二)は、私たちをいやが上にも愛の実践へと促してくれまします。相手の身になって、仕える愛は、枯渇するようであってはならないのです。イエスの贖いを通して注がれた神の愛を、福祉の源泉としてとらえるならば、福祉の概念は私たちが遠くあるものではありません。それぞれどこか、真実の愛を知っている者は、社会福祉ならぬ個人的日常的福祉を、わが生活の中に証しすることができますのであります。